

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・日本語・日本文学科
藁科 勝之

作成日 2023年5月19日

1. 教育の責務

2015年（平成27年）度から弘前学院大学文学部・日本語・日本文学科に採用され、本年2024年）で9年となる。 日本語学関係科目を担当し、主として古典語を中心として、講義、演習科目を担当。 また、大学院文学研究科を兼務している。				
2023年度担当授業				
科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
古典日本語学入門	1～2年	講義	後期	古典語の音韻、文字、語法、語彙の基礎
日本語史A	2年	講義	前期	音韻史
日本語史	2年	講義	後期	文法史、語彙史、言語生活史
日本語文法論A	2年	講義	前期	現代語文法
日本語文法論B	2年	講義	後期	古典語文法
日本語学演習 I C	3年	演習	前期	規範と誤用
日本語学演習 I D	3年	演習	後期	ゆれ
日本文学演習Ⅲ・近世文学	院2年	講義	後期	歌舞伎、江戸文学と江戸文化

2. 教育の理念

多様な価値観が複雑に絡み合う現代において、より良い社会を創っていくためには、相互に分かり合うための他者とのコミュニケーション、とくに言語コミュニケーションのあり方が重要であることを、若い学生に認識してほしい。言語の学びとは理論的把握と実際の具体的運用を目指すこと、これが私の日本語学教育の理念や目的である。

具体的には授業等の教育活動において実践されるが、担当科目が講義においては古典語を主としており、演習では現代語を扱っているところから、以下のような方針・姿勢で行っている。

1. 古典日本語を扱う講義科目の場合

古典語を、現代と切り離された過去のものとして扱うのではなく、現代語を成立させている基礎、根拠として観ること。すなわち古典語を知ることの意味には、現代語のより深い理解がある。

2. 現代日本語を扱う演習科目の場合

この場合であっても、古典語との連続性を意識させ、変化・変遷した結果としての現在の用法を考察する。現在を遡りつつ、その変容を跡づけることによって、現在の姿の存在理由が理解できる。そして現代語のより良い理解のために、前代の言語の様相を把握し、変化を産み出した要因を考究する。

上記1、2を総合して、古典と現代のつながりを理解し、誤解や行き違いのない円滑なコミュニケーションのため、日本語表現の規範的用法について判断し、適切な言語生活を営むための一助とする。

3. 教育の方法

1. 日本語学の古典分野の場合

教材としては、当然ながら過去の文献・資料がその基礎となり、その内容、とくに語学的意義を解説することが中心である。

同時にその資料の同時代的意義とともに、現代語との関連について解き、歴史的変化の様相にも関心をもてるように説明している。

またその際、当該事項に興味・関心を持ってもらうために、できるだけ原資料またはその影印などを用いて、リアルなありさまを紹介し、同時代の雰囲気味わってもらうようにしている。

2. 日本語学演習の場合

学生はまず、各自のテーマを設定し、次いで自ら調査を行い、プレゼン資料としてまとめる。

調査の段階では、諸辞典、文献等を渉猟し、できるだけ過去に遡って、どの時代まで根拠を求めることができるかを探ってもらうようにしている。

演習授業の発表の場面では、質疑応答のディスカッションを自ら司会・進行する。

なお、テーマの設定から調査の範囲、考察の質や深さ、口頭発表の態度など、ループブックによって自己評価を行う。

4. 教育の成果

評価について、「授業評価アンケート」結果を踏まえて記す。

1. 「学生自身の自己評価」に関して

1-1. 講義系の科目では、「シラバスに記されている到達目標や評価方法を読んで知っている」が学部・全学平均値より低かった。

1-2. また、「事前学修(予習)・事後学修(復習)に取り組んでいる」も学部・全学平均値より低かった。

2. 「授業担当者に対する評価」に関して

2-1. 講義系の科目では、「提出したレポートや課題をチェックして学生に返し、授業の理解に役立てようとしている」が学部・全学平均値より低かった。

2-2. また「話し方、言葉は聞き取りやすい」も学部・全学平均値より低かった。

2-3. 演習系の科目では、「学生の質問や意見に適切に対応している」が学部・全学平均値より低かった。

3. 「授業内容に対する評価」に関して

3-1. 「教科書、資料(ビデオ、スライド、プリント等)、板書は、授業内容の理解に役立っている」、また「この授業から、新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができる」について、講義系では、全学及び学部の平均値と同評価であり、それほど低い評価ではなかった。

3-2. 演習系では、「シラバスの記載に沿って展開している」について、とくに低い評価ではなかった。

5. 教育の改善

上記4の「授業評価アンケート」結果を踏まえて、改善すべき点を記す。

1-1. 到達目標・評価方法も含めてシラバスの内容を具体的に説明する必要がある。

1-2. かなり評価が低く、事前事後学修の習慣がないと思われたので、事前学修については予め次回の要点を示し、事後学修については重要事項の整理を指導する。

2-1. 提示課題の質・量を、これまでよりやや細分化して、回数を増やしてこまめにチェックするなどの工夫をして対処し、様子を見てみたい。

2-2. 解説すべき事項が多く、早すぎる面があるので、ゆっくり話すことを心がける。

2-3. 演習時における相互のやりとりの場面と時間を多く作るように心がける。

3-1. 現状を維持しつつも、もう少し高度な内容も盛り込んでいきたい。

3-2. とくに低い評価ではなかったが、進め方についてはシラバスに従って進めているものの、学生の理解度の状況に応じて進度等を緩めたり早めたりすることもあるので、そのような場合には、その理由等を説明して理解してもらうようにする。

6. 教育の目標

短期的には、さしあたって、「授業評価アンケート」の結果を踏まえて、授業方法や工夫の仕方の足らざる部分を補い、改善・工夫を進めたい、その結果の可視化については、1～2年後を目途に達成したい。

中長期的には、学生各自の学修効果・成果の向上が期待される方策を目指したい。学生が主体的に事前学修・事後学修に取り組むことができれば、学修効果・成果が向上することは明白である。さらに反転授業が完全実施できれば最善である。したがってその前提として、事前学修・事後学修をより容易にできるような運びかたを工夫していかねばならないが、これを含めて日本語学分野の学びにとってのより良い方策を探っていくことを中長期の目標とする。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 定期試験結果、および中間小テスト結果
4. 学生提出の課題レポート
5. ルーブリック（演習）
6. 授業改善書